

HANDS GRANPRIX へ

ハンズ大賞の一次審査から作品の提出までは、冬休みを挟んで1ヶ月近くあるので、提出前には再度調整の必要があるとは思っていましたが、まずは一次審査の結果を待つことにしました。しかしなかなか通知はこず、諦めかけていたところ、12月20日過ぎに一次審査の合格通知がきました。

早速再調整を始めると、この1ヶ月ぐらいの間にやはり経時変化が起こっており、各部のゴムなどを張替え再調整をしたのですが、動かすとしてもスピードとのバランスがとれません。負荷をまかなう動力のゴムを増やすと、フレームが歪むのか、その動力に耐えられないのか、ガンギ車と天符が歯飛びして調速がうまくいかないことがあり、やはり負荷を落とすしかありません。結局着物を作り直すしかなく、年明け早々東急ハンズやユザワヤを着物となる和紙を捜して、飛び回る事となってしまいました。ほとんど男性客など寄り付かない和紙の売り場で、柄を選んだり、一枚一枚手で触って紙の柔らかさを確認したりしながらウロウロしているオヤジの姿は異様だったと思います。着物の部分はなるべく薄くて柔らかい和紙とし、襟と袖の部分だけ色違いで重ね着している雰囲気を出し、上掛けはちりめんの和紙を使い、厚みのわりに柔らかいものとししました。結局年が明けてからの冬休みだけでは間に合わず、提出日前日はほとんど徹夜で、提出日には有休をとって最後の仕上げと思いやったのですが、結局きりがなくここまでと諦めて梱包し、提出を指定された西武航空の配送所に持ち込んだのは、取り扱い時間終了の15分前で、滑り込みセーフといったところでした。

その後なんとか二次審査も通り、ハンズ大賞入選ということで、渋谷の文化村での展示を見に行ったのですが、ほかの方々の作品の完成度と比べ、ツギハギだらけの自分の作品の情けなさ、審査のときにも果たしてどこまで動いたのかという思いで、赤面ものでした。思い返せばはじめからちゃんとやり直す時間も十分あったはずなのですがそれもせず、何とか間に合わせて提出してしまったような状態で、今更ながら自分の詰めの甘い性格には情けない思いがしました。そんな思いもありいつの日か茶運紙人形を設計から見直して再度作ってみようとは思っているのですが、新しいことにしか興



味の向かない性格はいかんともしがたく、いまだに手つかずの状態、今回はとりあえず茶運紙人形を作った経緯を当時のメモを基に思い返しながらお話してみました。

こう書きながらせっかくのノウハウも忘れないうちに、もう一度形にしておかなくてはと思い始めた今日この頃です。